

越 知 中 学 校

研 究 同 人

校 長	須内 康雄	学習支援員	若月 秀子
教 頭	中野 聡美		徳弘 麻友子
教 諭	近澤 和司	ICT 支援員	高橋 秀幸
	足達 伸司	特別支援教育支援員	織田 京子
	安井 園未		藤原 茉白
	岡本 有生	学校図書館支援員	武智 克子
	伊藤 桃子	教員業務支援員	井上 蘭
	大石 裕也	用務員	尾碕 めぐみ
	和泉 早姫		
	中須 凌		
養護教諭	山中 理代		
総括主任	宮地 悦子		

～越知中学校～

R6 教科実践レポート

目次

越知中学校グランドデザイン	P52
国語科	P53～54
社会科	P55～60
数学科	P61～63
理科	P64～66
英語科	P67～69
音楽科	P70～72
保健体育科	P73～82

令和6年度 越知町立越知中学校 グランドデザイン

【学校経営理念（ビジョン）】

地域の公立中学校としての使命感を持ち、教師が同じ価値観を共有し、組織的な取り組みを進める。また、生徒の学力保障に責任を持ち、「学び合い」が定着した学校文化を構築する。このようなことを大切にしながら学校教育を行うことで、将来を担い時代の変化を乗り越え高い志や意欲を持つ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓いていく生徒を育成する。

【学校教育目標】

「自己実現のために自ら学び続ける意志を持ち、様々な人と協働して主体的に社会に参画しようとする生徒の育成」

～社会人基礎力を育て、地域や日本、世界で活躍する人づくり～

めざす生徒像

知

自ら考え、主体的に学び夢や目標に向かって粘り強く挑戦する生徒

徳

人に優しく、多様性を認め合い、仲間を支えともに成長する生徒

体

心身に関わる確かな学びの上に、運動習慣を持ち、健やかな心と体を創り上げる生徒

研究主題 「生徒が主体的に学び、考えを深める授業づくりと支持的基盤のある集団づくり」

今年度は、特に次の4つを取組の柱(重要課題)として学校経営を行います！

① 主体的・対話的で深い学びを実現する授業

- ◆「教科連携チーム会」【授業改善：価値ある課題や教材等の工夫・生徒がつながる言語活動と深い学び】
- ◆「小学校の財産」「授業スタンダード」を意識した生徒と教師が成長する授業づくり【見直し振り返り】
- ◆キャリア教育の視点で取り組む授業構成【学校での学びと社会とのつながり】 ◆国内英語研修

② 確かな(基礎基本)学力の定着

コグトレ: 認知機能強化トレーニング

- ◆教科の課題、すららドリル等による家庭学習習慣の定着【AIドリルによる個別最適化の取組】
- ◆「全校おち学」による取組：学習支援員や特別支援教育支援員等との協働による実態に応じた学習対応

③ 支持的基盤のある学級・学校づくり

コグトレ: 認知機能強化トレーニング

- ◆生徒理解の徹底【校内支援会やケース会・朝の職員間の情報共有・Q-U・生活アンケート・面談他】
- ◆特別活動や生徒会を中心にした仲間づくり【行事や体験活動を通して築く望ましい人間関係作り】
- ◆生徒の自尊感情と自己有用感の向上【学級活動・道徳授業・日常のボイスシャワー・メッセージカード】

④ 連携・協働して学び合う学校づくり

◆通信やHP等による積極的な情報発信

- ◆連携教育の充実(こども園・越知小・地域・行政等) ◆越知町学校運営協議会の開催
- ◆企業及び人材活用【ツムラ～越知の自然環境～・避難所開設運営訓練・職場体験学習から町への提言】

越知町学校運営協議会

小中連携(小中連携教育推進)



国語科テーマ

「総合的な学習の時間」と関連させた「国語科」の授業

「総合的な学習の時間」のテーマ

「越知町の豊かな自然環境を未来へつなげていくため～今、自分たちができること～」

I テーマ設定の理由

「総合的な学習の時間」の学習活動として行われる、情報を集める、調べる、まとめる、報告や発表するといった場においては、話す・聞く、書く、読むと言った能力が必要になってくる。これらは国語科として大切にしなければならない言語活動であり、「総合的な学習の時間」と言語能力の育成を目指す国語科との関連は大きい。

「国語科」で指導する基本的な知識や技能等が「総合的な学習の時間」において実際に働く場として活用されることで、より確かな力として定着することを期待してこのテーマを設定した。

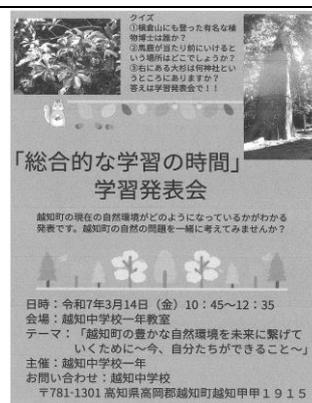
II 実践方法

知識や技能等の指導は「国語科」で、定着は「総合的な学習の時間」で行うことを基本的スタンスとしてワークシート等を用いながら取り組みを行った。

III 実践

<p>1 学期</p> <p>総合的な学習の時間</p>	<p>○越知の自然の魅力を発見しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・連携機関（高知県林業環境政策課・越知町産業課・ヒューマンライフ土佐・ツムラ）からの講義 ・課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現 ・ラフティング体験 ・中間発表 	
<p>国語科</p>	<p>単元名「調べて分かったことを伝えよう」</p> <p>言語活動「越知の魅力」をレポートにまとめる</p> <p>主な学習活動（調べ学習のスキル）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報の集め方を知り、図書資料やインターネットから知りたい情報を集める。 ・情報の客観性や正確性を確認する。 ・集めた情報を観点ごとに分類して整理する。 ・わかりやすく伝えるための構成を考える。 ・著作権に注意しながら、情報の引用の仕方を身につける。 <p>単元名「中心を明確にして話そう」</p> <p>言語活動「越知の魅力」を伝えるスピーチをする</p>	<p>「仁淀川からの被害と恵み」</p> <p>1 テーマ 仁淀川は豊後県石鎚山を水源としている川で、全国一般河川の水質調査で過去7回全国で利用されている。また流域では紙の原料となるコウゾが多く栽培されていて、紙にしかし仁淀川は川なので、いろいろな水害をおこしているかもしれない。実際に水害はあつた利益と被害について知りたいと思ふこのテーマを設定した。 答えの予想としては、仁淀川は人々に洪水、浸水のような被害を出している、あゆなどのめるために「仁淀川からの被害と恵み」について調べてみることにした。</p> <p>2 調査方法 インターネット 仁淀川のしおり</p> <p>3 調査結果</p> <p>(1) 仁淀川からの被害 仁淀川からの被害は主に水害で、戦後以降に24回洪水が観測されている。その中中島堤防越水が起り、「漏水による堤防法面崩壊、堤防亀裂、護岸崩壊等」他にで壊滅的な被害を受ける。仁淀川が浸水し、家屋被害全・半壊2128戸、床上浸水5戸を数立したり、放水路（トンネル）を整備したり、調整池を整備したりなど、仁淀</p> <p>(2) 仁淀川の恵み ①人への恵み 仁淀河の水は発電用水、水の安定供給、農業用水（稲田、吾南用水）、工業用水め、高知市の総使用量の約3分の1をまかなっている。その他にもキャンプ、水遊び、開催する場所になっている。 ②生き物への恵み 上流域にはニホンモンガ、ルンコウモリ、チヂブコウモリなどがいて、溪流部ゴ、タカハヤ（清流を代表する生き物）などがいる。源流付近にはシコクハコネオ中流域には狸、イタチ、アナグマ、アカネズミ、ヒメネズミ、アオダイショウ、て、コロニームクドリ、キジバト、ヒヨドリの休息場所、アユなどの産卵場などに</p> <p>(3) 私たちができること 私たちにできる簡単なことは、まず仁淀川に興味、関心を持つことだ。イベント川清流まつり、淀川トンガ祭り、仁淀川国産水切り大会、仁淀川親子ふれあいバツに積極的に参加したり、淀川について学んだり（水生生物調査（仁淀川ガリガサガ物の観察会）して仁淀川の情報を得て広げることが大切であると思ふ。</p> <p>4 考察 仁淀川からは洪水や浸水などの水の被害が人もおこっていた。仁淀川からの恵める。私たちに恵みを与えてくれる仁淀川を未来に繋いで行くには仁淀川のことについて</p> <p>5 参考資料 第2次仁淀川清流保全計画（改訂2版）（高知県林業振興・環境部環境共生課発行 https://www.mlit.go.jp/river/jiten（国土交通省） https://www.skr.mlit.go.jp/control（四国地方整備局）</p>

		<p>主な学習活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手意識、目的意識をもってスピーチの材料を選ぶ。 ・スピーチメモを作成する。 ・スピーチの練習（声の大きさ・緩急・間・表情等）をする。 ・スピーチの会を開く。
2 学 期	総合的な学習の時間	<p>○越知の自然を体験しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連携機関からの講義 ・横倉山フィールドワーク ・課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現 ・電子図鑑の情報保存 ・中間発表（文化発表会）
	国語科	<p>単元名「案内や報告の文章を書こう」</p> <p>言語活動「総合的な学習の時間」学習発表会のポスターを作る</p> <p>主な学習活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・案内文の情報を分析する ・案内文の目的と相手を確認する（相手や目的によって情報や表現の仕方が変わること理解させる） ・必要な情報を整理しポスターを書く
3 学 期	総合的な学習の時間	<p>越知の自然を守るために自分たちができることを提案しよう（予定）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現 ・学習発表



IV 今年度の検証（成果と課題）

実践をする上で心がけてきたことは、学びの有用性や必要性を感じさせながら、基本的な知識や技能等の指導は国語科で、実際に働く場として活用し定着させるのは総合的な学習の時間である。情報の取り扱い方やスピーチについては、課題設定からまとめまでのサイクルを授業と総合的な学習の時間において各2サイクルできたことで、徐々にではあるが「伝える」ことへの意識と技能に向上が見られてきた。

しかし、情報を読み取る力、選別する力、要約する力等、国語科として身につけるべき力はまだ弱く課題は多く残されている。

V 次年度に向けた改善策

国語科で身につけるべき基本的な知識や技能等の力の定着を図りながら、その知識や技能を生かし使う場を多く設定して行くことで、生徒たちの言語活動がより豊かになることを目指し実践を続けていきたい。

社会科テーマ

生徒が主体的・協働的に学び合い、確かな学力を身に付ける授業

I テーマ設定の理由

現代の社会科授業では、学習課題に対しての情報収集、収集した資料等の情報を基にした考察、考察を基にした学習課題に対しての答え（結論）を、自身の力や仲間との協働の中で学び取る力が求められている。コロナ禍以降、急速に学校現場での ICT 活用が進み、生徒が学習用具として ICT を主体的に活用できることが、現代の社会科の授業で求められている力を身に付ける上でも必要と考える。一方で、ICT 活用を進める中で、安易に答えだけを検索して学習を終わらせることで本質的な理解にならないことや、答えだけをグループで共有して活動が終わってしまう場面を、自身の授業や授業研などでも見かけるようになった。

そのため、ICT を活用しつつ、現代の社会科授業で求められている力を育成するために、「主体的・対話的で深い学びを実現する授業」「確かな学力の定着」の 2 つの視点を取り入れたテーマを設定した。

II 実践方法

(1) 主体的・対話的で深い学びを実現する授業

- ア 資料等の根拠を示した説明
- イ 学年の状況に応じた学習形態の工夫

(2) 確かな学力の定着

- ア 情報を比較したり関連させたりすることによる構造的な知識の構築

III 実践

(1) 主体的・対話的で深い学びを実現する授業

- ア 資料等の根拠を示した説明

社会科の学習の中では資料の活用が必要不可欠であり、資料の読み取りや、資料から得た情報を根拠にした説明をできるようになることが生徒の主体的・対話的な姿につながり、深い学びの実現につながる。そのため、授業の中で生徒自身が必要な資料を探すことだけでなく、ICT を活用して生徒に使ってもらいたい資料を教員が送ることで、資料を探すことが難しい生徒も含めて全員が資料を活用できる環境を整え、資料を根拠にした思考や説明をしやすくした。

生徒に送った資料の例

	アメリカ合衆国	日本
1人あたり*の耕地面積 (ha)	71.3ha	1.7ha
1人あたり*の穀物収量 (t)	195.7t	4.8t

*農林水産省調査

イ 学年の状況に応じた学習形態の工夫

学年によって生徒の学力や学習の状況が異なる。そのため、学年の状況に応じて、学習形態を工夫した。1年生は、1学期は個人思考の時間を長く確保して班での活動へ移行する学習形態をとっていたが、個人で考えることが難しい生徒が多かった。そのため、2学期からは活動の時間を20分程度まとめて確保し、個人で学習に取り組んだり、自由にグループを作ったり、疑問点や課題解決の方法を他の人に教えてもらいに行ったりするなど、学習形態の自由度を高くし、生徒が主体的に学びやすい環境を整えた。2年生は、学力差はあるものの、個人でも努力して考えようすることができる生徒が多いため、個人思考→班といった従来型の学習形態をとることで、自身の力を高めつつ、他の生徒との学び合いの中で分からなかったところを理解できるようにした。3年生は、全体的に学力が高く、個人でも十分に考えられる生徒が多いが、話し合い活動になると誰とでも話ができる人とそうでない人の差が大きいため、個人思考→自由に動いて構わない時間といった学習形態をとり、話し合ったり学び合ったりしやすい人と一緒に確認をしたり協議をしたりすることができる時間を確保した。

(2) 確かな学力の定着

ア 情報を比較したり関連させたりすることによる構造的な知識の構築や獲得した知識が実際に使うことのできる本当に理解した状態になるかどうかは、その意味と結びついているかどうかや他の知識とどのように関わっているのか（関連）、他の知識と何が違うのか（比較）といったように、他の知識（情報）と比較したり関連させたりする中で、獲得した知識そのものに意味付けがなされているかどうか重要である。その

実際の授業の板書



ため、社会科の授業の中でも比較したり関連させたりすることの重要性を何度も説明したり、授業のめあての中に比較や関連に関わる文言を意図的に入れたり、板書を比較や関連が分かりやすいように書いたりするなどの工夫をした。

IV 今年度の検証（成果と課題）

（1）主体的・対話的で深い学びを実現する授業

ア 資料等の根拠を示した説明

授業の中では、4月から比べると、説明の際に資料を見せるだけでなく、ポイントとなる箇所を指で指し示したり書き込みをしたりするなど、資料を上手に活用している場面が多く見られるようになった。このことから、資料をどのように活用することが自身や仲間の学びを深めることにつながるのかを実感できた生徒が増加したと考えられる。

令和6年度高知県学力定着状況調査において、思考・判断・表現の観点の問題の自校採点の正答率が、1年生で31.8%、2年生で44.5%であった。

1年生は、4月に実施した標準学力テストの思考・判断・表現の観点の問題の正答率が15.2%で、目標値と比較すると-4.8%、2年生は昨年度の高知県学力定着状況調査における思考・判断・表現の正答率が47.7%で、目標値と比較して-4%という結果であった。このことから、今年度の高知県学力定着状況調査の正式な結果や目標値はまだ分からない状況ではあるが、テストの数値の面で見ると、1年生は、4月よりは改善されたものの、数値そのものは低い状態であること、2年生は、数値そのものが低いというわけではないが、昨年度よりもパーセンテージは-3.2と下がったため、一定の成果はありつつも、課題も残されており、今後の改善が必要であると考えられる。今年度の高知県学力定着状況調査の結果が分かり次第、分析をし直し、改善策を考えて実行していく。

イ 学年の状況に応じた学習形態の工夫

1年生については、1学期と2学期を比較すると、学習をする際の生徒の様子が大きく変化した。特に、グループを作っている仲間と資料を一緒に見ながら「この資料から～について分かるんじゃない?」「この2つの資料をみたら～ってこともいえるよね!」といったような、学習課題に対しての話し合いや情報共有がより活発に行われるようになった。2年生については、学力の高い生徒は自身の力で学習を進めることができるため、その分学力の中下位層の生徒には教員が寄り添いヒントを与えることができ、ターゲットを絞った学習支援につながった。3年生については、話し合い・学び合い活動が活発になり、その中で他者の意見を聞いて「そういった考え方も確かにあるよな～」など、自身とは違う新たな考え方に出会い、学びを深めている様子もみられるようになった。

ICTを活用しながら、資料を根拠にして説明している様子

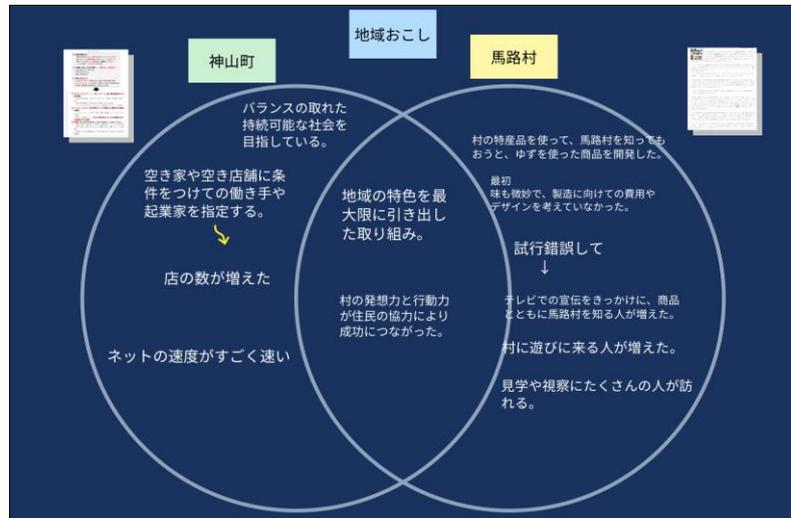


(2) 確かな学力の定着

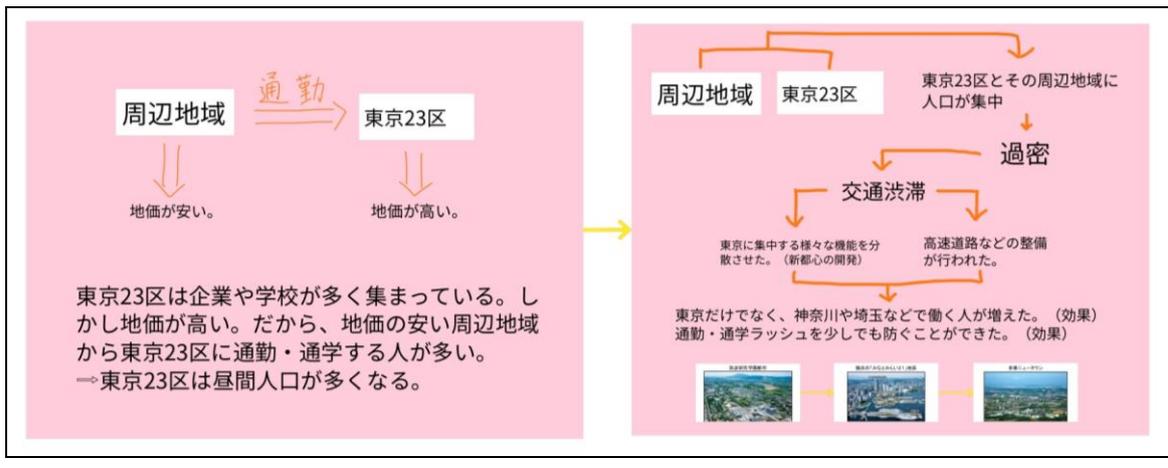
ア 情報を比較したり関連させたりすることによる構造的な知識の構築

授業において、収集した情報を比較したり関連させたりすることで、構造的な知識にする中で、構造化を視覚的に分かりやすくするようなまとめ方をする生徒が増加した。

生徒が作成した知識の構造化の例 1



生徒が作成した知識の構造化の例 2



令和6年度12月までに実施した主なテストの平均点・正答率は以下の通りである。

(不登校生徒は除く。高知県学力定着状況調査は自校採点の結果。)

	実力テスト		期末テスト		高知県学力状況調査
	月	平均点	学期	平均点	
1年	4月	26.2	1学期	30.6	全体…34.6 知識・技能…36.5 思考・判断・表現…32.5 記述式…13.1
	9月	54.4	2学期	40.0	
2年	4月	31.3	1学期	52.0	全体…38.5 知識・技能…35.0 思考・判断・表現…45.5 記述式…37.0
	9月	42.5	2学期	48.2	
3年	4月	49.3	1学期	60.1	/
	6月	35.6			
	9月	46.2	2学期	61.5	
	11月	50.5			

この結果から、高知県学力定着状況調査においては、2年生の思考・判断・表現の観点の正答率以外については厳しい結果となった。特に、知識・技能の観点における正答率が低く、基礎・基本の定着に課題がみられている。実力テストにおいては全学年ともに点数が向上している。期末テストにおいても、2年生は1学期よりも2学期の点数が下がってはいるが、2年生の昨年度の期末テストの平均点で最も高かった時が35.8であったことから、今年度は全ての学年で一定の成果が出たといえる。一方で、3年生は実力テスト・期末テストともに一定の点数が取れているものの、1年生については特に定期テスト、2年生については特に実力テストの結果が良くなかった。

これらのことから、授業内での学習においては取り組みの成果がみられてはいるものの、その学習がテストの数値結果にはあまり反映されていない部分もある。今後も粘り強く能力ベースの力をつけ、学力調査の数値結果に反映されるような指導方法などの工夫改善による授業改善の取組の強化が必要だと考える。

V 次年度に向けた改善策

今年度の結果から、授業の中では生徒の成長した姿が良く見られており、テストにおいても一定の成果がみられている部分もある。一方で、1年生の思考・判断・表現の観点、1・2年生共通で知識・技能の観点で課題がみられた。そのため、もうすでに取り組んでいる部分もあるが、次年度に向けて、

- ア 毎時間の授業の中で、めあてと学習課題の中で、ポイントとなるところを生徒と確認をしてチェックを入れる
- イ テストにおける「設問」が授業の中での「学習課題」、テストにおける「解答の条件」が授業の中での「めあて」、テストにおける「自身の解答」が授業の中での「まとめ」にあたることを何度も確認をすることで、日頃の学習の中での考え方が実際のテストの際の考え方と結びつくことの意識づけを強くする
- ウ 知識・技能の未定着改善のため、毎時間の小テストで出題した問題やその他の重要語句等を授業の初めに確認する。また、小テストで間違えた問題については、授業外の時間で詰めをすることで定着を図る

の3つのことを実践し、来年度には現状の課題を改善できるようにしたい。

数学科テーマ

確かな学力を定着させ、その知識をもとに課題を協働して解決する
～学習形態の工夫と教材研究～

I テーマ設定の理由

数学科において、「日常の事象を数理的に捉え、数学を活用して論理的に考察する力」「既習の内容を基にして、数量や図形などの性質を見だし、統合的・発展的に考察する力」「数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表現する力」が育成を目指す資質・能力として挙げられる。どの内容においても、既習内容を基に発展・活用・表現する力が必要であると考えられる。そこで、確かな学力を定着させることが、育成を目指す資質・能力につながると考えた。また、それを個人のみで考えるのではなく、協働して課題を解決することにより、表現する力やより発展した考えにつなげていくために、今回の研究テーマを設定した。

II 実践方法

基礎基本の定着、既習内容を活用し協働して課題を解決していくために、以下の4項目を実践した。

- (1) 毎日課題
- (2) グループでのプリント（復習）学習
- (3) 日常生活につながる課題設定から見通しを持った課題解決
- (4) 知識構成型ジグソー法（協働学習）

III 実践

(1) 毎日課題

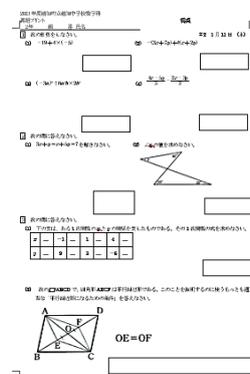
1・2年生は、入試に対応した計算問題に加え、既習事項で、学テ等において課題の多い関数の問題、また現単元の内容の基礎基本を中心とした復習問題、3年生においては、入試の過去問のうち、大問1として出題される基礎基本の内容を中心に家庭学習として毎日行った。内容は1週間、ほぼ同じような内容を出題することで基礎基本の定着を図った。

(2) グループでのプリント（復習）学習

学習内容を定着させる時間として、定期的に単元の復習をプリントを用いて、3人から4人のグループで教え合いをする活動を行ってきた。自分自身の理解はもちろん、友達に教える活動を通して、さらに理解を深めることに加え、数学的な表現を用いた説明ができるような工夫を図った。

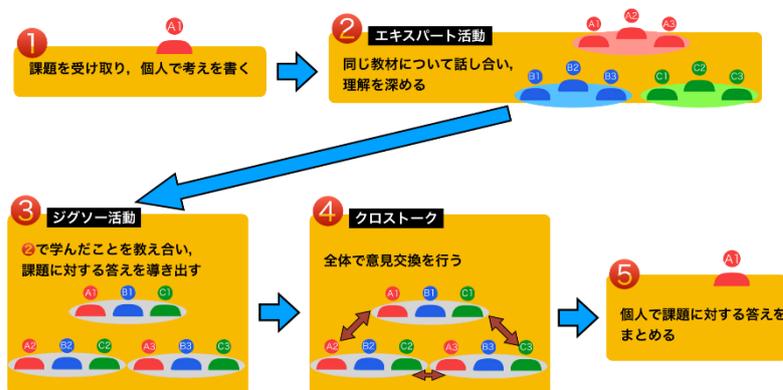
(3) 日常生活につながる課題設定から見通しを持った課題解決

各単元の活用の場面で、既習事項をもとに日常生活とつながるような課題を設定した。その中で、どの既習事項が課題解決する上でどこどうつながるのか、アニメーション（動画）等を用いて、キーワードを引き出すような発問を設定し、見通しを持たせ課題に取り組ませるように工夫した。



(4) 知識構成型ジグソー法（協働学習）

ある問に対して、知識を一方向的に教え込むのではなく、生徒同士が対話を通じて知識を深める協働学習を行った。



IV 今年度の検証（成果と課題）

(1) 毎日課題

【成果】1・2年生においては、ほぼ同じような内容を1週間出題することである一定、基礎基本の定着を図ることができた。3年生においても実力テストにおいて、大問1の正答率が少しずつだが上がった。

【課題】基礎基本はある一定力がついてきているが、実力テストや学力テストにおいて、文章題や立式などの応用問題については正答率がなかなか伸びない。

(2) グループでのプリント（復習）学習

【成果】3人から4人の少人数のグループで教え合いをすることで、自分自身の理解はもちろん、友達に教える活動を通して、さらに理解を深めることができた。また、教え合いの中で数学的な表現を積極的に用いて説明しようとする姿がみられた。

【課題】グループによっては学力差や人間関係等でスムーズに活動が行えず、理解を深められないグループもあり、個人思考で終わる部分があった。

(3) 日常生活につながる課題設定から見通しを持った課題解決

【成果】課題解決のためのツールを発問を通して、見通しを持たせることでイメージさせ、スムーズに課題に取り組める場面が多くあった。

【課題】課題解決のためのツールが分かっても、それをどのように活用したらいいのか分からず手が止まる生徒がいた。

(4) 知識構成型ジグソー法（協働学習）

【成果】一人ひとりに役割があることで、自分たちで考えていくというところから興味関心を持って取り組むもうとする場面が見られた。

【課題】エキスパート活動における課題の難易度が生徒の実態に合っていない部分があり、その内容を理解できていないことからジグソー活動においても答えまで導くことができていない。

V 次年度に向けた改善策

- ・毎日課題においては、文章題や活用問題の内容についても出題し、立式するための手立てとして、スモールステップで課題を考えさせる。
 - ① わかっていること、求めたいものにそれぞれ線を引かせる。
 - ② 数直線や表、ことばの式を用いて見通しを持たせる。
 - ③ ②をもとに、実際に立式させる。
- ・グループでのプリント（復習）学習では、グループでスムーズに学習に取り組めるようにするために、帯タイム（1・2分）を毎時間設定し、ペアやグループで問題を出し合ったり、考える時間を確保していく。理解が不十分な生徒については、T2もしくは学習支援員を活用し、グループ学習時に生徒の実態に応じた内容に取り組みさせるなど学力の底上げを図っていく。
- ・日常生活につながる課題設定から見通しを持った課題解決においては、基礎基本の反復から定着を図り、その学習がどうつながっていくのかを授業や単元の導入等で話をするこゝでイメージを持たせやすくし、写真や動画、アニメーションを活用することで、視覚的な見通しから課題解決へとつなげる。
- ・知識構成型ジグソー法（協働学習）においては、課題内容の精選に加え、生徒の実態に応じたエキスパート活動の課題をヒントカードや穴埋めの問題にするなど難易度を変える。一人ひとりが考えを持つことができるようにし、ジグソー活動・クロストークでさらに考えを深められるようにする。

I テーマ設定の理由

理科授業においては、従来より問題解決型学習が行われてきた。現在の学習指導要領は、さらに探究の過程を重視したものとなり、理科授業においてもこれに基づいた科学的思考力の向上が求められている。しかし、探究の課題を重視することで、基本的な知識定着の反復学習や演習時間設定が困難になっている。そこで理科における研究の柱を、基礎的な知識・理解を念頭に置いた「確かな学力の定着」とした。

II 実践方法

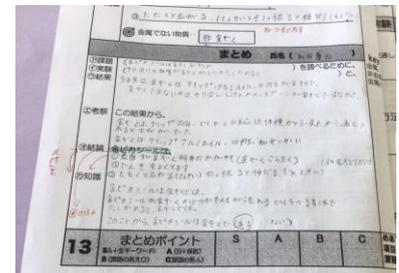
基礎的な知識・理解を定着させるために、以下の4項目を実践した。

- (1) 授業復習型まとめ
- (2) 課題ごとのステップ別演習
- (3) 試験クリア形式の基礎定着
- (4) 意味理解型の小テスト

III 実践

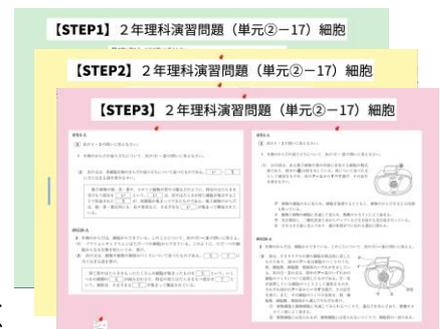
(1) 授業復習型まとめ

授業の流れを自分でまとめることで、身につけるべき知識と思考の流れを定着させる。低学力の生徒用に、ワークシートのどの部分を見れば良いのかを⑦～の記号で示し、書き出し文をつけることで授業の流れを自力で復習できるようにした。



(2) 課題ごとのステップ別演習

例年の課題であった演習量の不足を補い、学習内容の定着を図るため、ワークシートごとの演習問題を配布した。内容は学力差に合わせて、基礎的な内容から高知県の高校入試問題までの問題を選択できるようにした。



また、単元・期末テストには、この演習問題を中心に出题し、日々の演習の大切さと効果を実感できるようにした。授業の中ではステップ1（基礎）を全員で解き、ステップ2と3は任意で解くこととした。

(3) 試験クリア形式の基礎定着

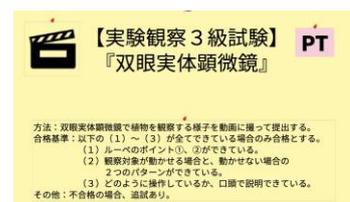
実験観察の器具の安全な使用は理科で身につけるべき大切な技能であり、高校入試問題にも毎年出題されているが、正確に操作できる生徒は少なく、定着率は高くない。そこで、実験観察器具については実際に



操作している様子を動画に撮り、「免許」取得試験形式で技能を身につけてもらうこととした。合わせて、薬品・作図・公式についても簡単な試験形式で意識付けを行った。

(4) 意味理解型の小テスト

理科の重要語句については、以前から小テストを実施してきたが、定着は不十分だった。また、採点と評定への反映に労力がかかっていた。今年はロイロの4択式テスト機能で意味理解を問う形式に変更した。また、2学期からは反復練習ができるようにテスト後に、使用した問題を配布している。



IV 今年度の検証（成果と課題）

(1) 授業復習型まとめ

【成果】1学期通して練習することで、ほとんどの生徒が授業の流れを自力で復習できるようになり、学習内容の定着に役立っていると思われる。また、2学期からは記号のないまとめ欄（自由記述）も選択できるようにしたことで、多くの生徒が自由記述のまとめに取り組み、探究の過程を意識したまとめができるようになってきた。

【課題】特定の生徒の提出遅れ、未提出が多い。1年生の記述内容が向上していない。

(2) 課題ごとのステップ別演習

【成果】期末テストでは、演習問題を解く生徒が増えたことで得点が上昇したと思われ、一定の成果が見られた。また、2学期からは宿題として全員が演習問題に取り組めるようにしたことで、授業内容の定着につながった。

【課題】演習問題に類似した問題を定期テストに出題しても解けていない生徒がいる（考えられる原因：そもそも宿題ができていない、宿題で誤答のままになっている）。

(3) 試験クリア形式の基礎定着

【成果】以前に比べて実験器具の操作について真剣に身につけようとする生徒の様子が見られた。操作実技テストを行うことで「見ているだけ」の生徒はいなくなった。

【課題】実際の実験場面では正確に操作できていない生徒もいる。実技テストに合格した生徒の半数近くが、しばらく後の実力テスト等では同様の問題を正解できていない。

(4) 意味理解型の小テスト

【成果】検証できていないが、ワークシートと連動させているため意識付けにはなっていると思われる。準備・実施時間の短縮と採点集計の自動化を達成できた。

【課題】小テストで正答率92%の問題が定期テストでは57%であり、重要語句の定着に結びついていない。

V 次年度に向けた改善策

従来から不足しがちであった基礎知識の定着に向けて、いくつかの方法でアプローチすることがで

き、一定の効果は見られた。しかし、期待した成果が出ていない取り組みもあり、改善・変更の必要も感じている。特に低学力層の生徒に基礎的な知識を定着させるには、今まで以上に丁寧な説明、反復練習する時間が必要である。問題はその時間を、今の学習時間の中では確保できない点にある。理科の授業においては、観察・実験は欠かすことのできない学習過程であり、自ずと残りの学習に割り当てられる時間も限られている。今後は、この限られた時間を最大限有効に活用できる学習方法を見出していくことになる。

まず、「(1)授業復習型まとめ」については、知識の定着に欠かせない授業内容理解に大きく寄与しているため、継続しつつ、特に1年生には他学年の記述例を参考にまとめ方練習の時間を設定し、家庭学習の方法を身につけさせたい。「(2)課題ごとのステップ別演習」については、これまで同様宿題として取り組ませるが、反復練習の必要がある問題については、授業中に演習時間を確保する。そのために、振り返りの共有・小テストについては当分カットする。「(3)試験クリア形式の基礎定着」は、観察・実験を学習の軸とする理科の授業にとっては不可欠だと考えられるため継続して取り組むが、合格基準を見直し、しっかり身につく内容に改善する。「(4)意味理解型の小テスト」については、効果が薄いことや演習時間の確保の必要から廃止とし、英単語の習得に利用されるペア学習のように、重要語句暗記をペアで短時間取り組む形式に修正していきたい。

上記の内容を生徒の基礎学力向上につなげるには、単元計画の見直し、授業タイムマネジメントの改善が必要であり、それが今後の授業改善の柱となると思われる。

英語科テーマ

「英語を使って、チャレンジすることを恐れない授業づくり」を通して、英語への苦手意識の減少を目指し、学力の定着をスモールステップで行う

I テーマ設定の理由

英語の一番の特徴は、「言語」であることだが、本校のほとんどの生徒が英語に対する苦手意識を持っている。日本語とは違う言語で外国の人とコミュニケーションを図る一つのツールとして、文でなくても単語だけでも言葉や想いは伝わり、単語一つからでも想像し、質問の答えを見つけられることを知ってもらいたい。そんな思いからどんな場面においても、「目的・状況・場面を想像しながら話す」、「誰とでも英語を用いてコミュニケーションを図ることができる」ことで、間違えてもいい授業の雰囲気作りを意識し、英語への苦手意識を少なくするように行った。同時に、知識・技能の定着、思考・判断・表現を見取る4技能を意識した単元テストの実施を通して、本校の研究の4つの柱の中から、「③支持的基盤のある学級・学校作り」と「②確かな(基礎基本)学力の定着」を目指すことにした。

II 実践方法

(1) 各学年、各単元で4技能に合わせた単元目標を設定。

※4技能とは「聞くこと」、「話すこと(発表)」、「話すこと(やりとり)」、「読むこと」、「書くこと」のこと

(2) 各単元で取り扱う4技能に合わせた単元テストの実施。

(3) クラス内でも違う人と交流し、コミュニケーションを図る。

(4) キーワードから話の流れを想像する習慣をつける。

III 実践

(1) 各学年、各単元で生徒の生活に身近なものを取り入れ、4技能「聞くこと」、「話すこと(発表)」、「話すこと(やりとり)」、「読むこと」、「書くこと」に合わせた単元目標を設定し、目的・状況・場面を変え、多方面からイメージしやすいように設定した。

<p>1年生</p> <p>単元ゴール  (7時間)</p> <p>鋭い感覚と思考を持った探偵オチダとして、問題を解決するために問題が書かれた怪盗DACHIOからの挑戦状を読み取り、解決して敏腕探偵になることができる。</p>  <p>「読むこと」ア</p> <p>日常的话题について、簡単な語句や文で書かれたものから必要な情報を読み取ることができるようにする。</p>	<p>2年生</p> <p>UNIT GOAL </p> <p>世界の曲、音楽を新しく知ることを通して、紹介の仕方を練習して、自分のことや友だちにことをさらに知るために、好きな曲のことや理由を、友だちや周りの人に紹介することができる。</p>  <p>書くこと (イ)</p> <p>日常的话题について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができるようにする。</p>	<p>3年生</p> <p>UNIT GOAL </p> <p>物語の主人公になりきって、世界の現状を合わせて考え、「もしも~だったら」と過去を振り返りながら、みんなのこれからの未来がよりよくなるために、みんなで考えていくことができる。</p> <p>話すこと【やり取り】ウ</p> <p>社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて述べ合うことができるようにする。</p>
---	---	---

(2) 各単元で扱う4技能に合わせた単元目標に沿って、単元テストを実施した。ペーパーテストが苦

手な生徒はパフォーマンステストも苦手ということではないことも多く、そういった生徒を評価できるように取り組んだ。また、単元テストを行うにあたって、毎時間必ず帯活動で練習を重ねる時間を取り入れ、振り返りシートも記入するポイントを絞り、ゴールを意識しやすいものにして、スモールステップでゴールを意識させている。

1年生 単元テスト評価票

振り返りシート

Reflection

Today's goal

Yes No

2年生 単元テスト評価票

振り返りシート

Reflection

Today's goal

Yes No

3年生 単元テスト評価票

振り返りシート

Reflection

Today's goal

Yes No

(3) ペアとグループでの活動時間を作り、始まる時は「Hello」、終わりは「Thank you」ハイタッチなどを交わして、クラス内でも違う人と交流し、ヒントをもらったり、友だちの表現を知ったりして、コミュニケーションを図るようにしている。また、欠席者がいて、生徒のペアがいない場合は、ALT や支援員、教員が入り、生徒とのコミュニケーション活動を行っている。

(4) ALT や CD、音声から得た単語(キーワード)を聞き取り、そのキーワードから話の流れを想像する習慣をつけている。また、ALT がいるときは、基本英語で説明を行い、補足を JTE が行うスタイルにしている。そうすることによって、「英語」を「聞く」ことに耳が慣れ、キーワードを聞き取りやすくなる。

IV 今年度の検証（成果と課題）

(1) 各学年、各単元 4 技能に合わせた単元目標を設定

【成果】単元目標を設定し、目的・状況・場面を変え、多方面からイメージしやすいように設定したことによって、どんな場面で使われているのかイメージしやすくなったため、その時と場合に応じての返答ができるようになった。

【課題】目標が生徒の身近な生活に合っておらず、取り組み難いものになっている時があり、生徒の意欲が下がっていることもあった。4 技能の中で、苦手とする技能があった場合に、意欲が低下し授業に積極的に参加できていない生徒もいた。

(2) 各単元の 4 技能に合わせた単元テストの実施

【成果】単元テストを行うことで、ペーパーテストが苦手な生徒はパフォーマンステストも苦手ということではないことも多く、そういった生徒を評価できた。また、単元テストを行うにあたって毎時間必ず帯活動として少しずつ、練習を重ねる時間を取り入れ、振り返りシートもポイ

ントを絞り、ゴールを意識しやすいものにして、スモールステップでゴールを意識させることで、文法の定着ができた。

【課題】 単元テストに向けた言語活動を繰り返し行った単元の終盤になっても何をしているかわかっていない、文法の定着ができていない生徒がいた。

(3) クラス内でも違う人と交流し、コミュニケーションを図る

【成果】 ペアやグループで活動する時間を作ることで、生徒間で文法の定着を図ることができ、友だちの表現を聞き、表現の工夫や仕方を生徒間で確認することができた。

【課題】 コミュニケーションを苦手とする生徒がいる中で、生徒間での交流が難しいところがあり、そのことが生徒に負担をかけてしまっていた。また、生徒の中にはただ日本語で話をし、英語を使っていないところや、一つの会話が終わると友達とのおしゃべりの時間になってしまっていたり、ペアでの活動自体ができていなかったりしたところもあった。

(4) キーワードから話の流れを想像する習慣をつける

【成果】 読む時や会話でも、キーワードを聞き・読み取り、テストでのメモも多くなった。そこから話を想像できるようになっていたり、聞き取れる単語が増えてきている。聞き取った後は必ずペアで確認の時間になっているので、そこで内容の再確認ができるようになっている。また、わからない単語はALTやJTEが簡単な別の英語の表現で表したり、ジェスチャーを使うなどして、英語を聞く時間や英語で何を言っているのか考える時間を増やすことができた。必要に応じて、日本語を使い、英語とのバランスを図ることもできた。

また、以前より全員が分かりやすい英語を使ったり、文法の語順を意識させたりすることによって、話すときやワークシートに取り組むときに前よりも文法が定着しやすくなった。

【課題】 キーワードを聞き取れるような語彙が不足している。また以前より、英語を聞く時間や英語で何を言っているのか考える時間が増えたことによって、英語で何をいっているのか表現しているのかが分からず、授業がわからないという意見が1学期にはあった。そのため、授業では目標とする文法の語順をホワイトボードに貼り、以前より簡単で分かりやすい英語を使い、必要に応じて日本語を使用して、ペアやグループで確認する時間を多くとるようにした。

V 次年度に向けた改善策

各単元の目標の設定を生徒がイメージしやすいものを見つけ、設定していき、学年にもよるが、学力差の幅が大きいので、低学力層も単元テストでB評価が取れるように、ヒントカードの作成や語彙力の向上のために単語小テストを定期的に行なっていき、学力の定着を図っていきたい。単語の小テストを行うこと、そして、目的・状況・場面に合わせた文を作る機会を増やすことで、生徒間でもコミュニケーションを図れるようになったこと、誰とでも生徒同士で活動できる時間が増えたことが成果として挙げられるため、来年度以降も継続して行っていく。語彙力、文法の定着も合わせていくため、生徒間での教え合いが増えると、より定着も図れ、定期テストでの点数の向上にも繋げられると考える。また、warm-upの時間で行なっている質問に対する答え方の確認をすることで、表現の幅を広げていく活動も続けて行い、「自分の知っている英語」で表現できるように声掛けも行い、学力の定着を図りたい。

音楽科テーマ

1. ロイロノートの共有ノートを活用した、主体的・対話的で深い学びの実現
2. アルトリコーダーの確かな演奏技術の定着
3. 主体的に学び、考えを深める手立てとしての、振り返りシートの効果的な活用法

I テーマ設定の理由

先ず今までの取り組みの中で何が不十分だったのかを、『研究4つの柱』と照らし合わせて考察した。1つ目はロイロノートの共有ノート機能の活用、これで「①主体的・対話的で深い学びを実現する授業」を目指した。2つ目はアルトリコーダーで躓いている生徒への支援、3つ目が振り返りシートの効果的な活用だった。この2つは「②確かな（基礎基本）学力の定着」（音楽は学力というよりも技術になる）を目指した。

II 実践方法

(1) 「ロイロノートの共有ノート機能を活用した、主体的・対話的で深い学びの実現」

ア、合唱の取り組みで、歌詞の意味を理解して音楽表現を豊かにするという狙いで、共有ノートに入れた歌詞の PDF ファイルにグループで書き込みをさせた。その後、それを基に発表し合って全体共有した。

イ、全校合唱の時に共有ノートを使って良かったところや改善点、他学年の発表から学んだり気付いたりしたことなどを自由に書き込んでもらって学年内で共有し、それを基に各学年発表し合って全体共有を図った。

ウ、3年の鑑賞の授業で、「イメージに沿う選曲した楽曲を根拠をもって提案する」というめあてを達成するために、グループ活動でプレゼン資料作成に共有ノートを使用した。

(2) 「アルトリコーダーの確かな演奏技術の定着」

ア、個人のレベルに合った選曲。

イ、個別指導。（授業内）

(3) 「主体的に学び、考えを深める手立てとしての、振り返りシートの効果的な活用法」

ア、振り返りシートの項目の見直しや活動に応じた工夫。

イ、肯定的評価を加えての返信。

III 実践

(1) -ア-



(1) -ウ



(2) 1学期は各学年それぞれ全員が同じ楽曲に取り組んだ。主にペアでの活動を取り入れ、お互いが教え合いながら根気強く練習に励むよう支援した。3学期は難度が違う2つの楽曲を用意し、生徒の意思で選択させ取り組ませた。個人指導の時間も取り入れた。

(3)

合唱コンクールに向けての取り組み

学年	楽曲	指導者
3年	正藤	混声2部合唱
指導者	野田 清太郎	野田 清太郎
パート	ソプラノ	パートリーダー 田中千尋

練習の記録

1. 1.10 1.15 1.20 1.25 2.0 2.5 3.0 3.5 4.0 4.5 5.0 5.5 6.0 6.5 7.0 7.5 8.0 8.5 9.0 9.5 10.0 10.5 11.0 11.5 12.0

合唱コンクールに向けての取り組み

学年	楽曲	指導者
2年	滝澤飛行	混声2部合唱
指導者	米来CLUB	米来CLUB
パート	ソプラノ	パートリーダー 山中千尋

練習の記録

1. 1.10 1.15 1.20 1.25 2.0 2.5 3.0 3.5 4.0 4.5 5.0 5.5 6.0 6.5 7.0 7.5 8.0 8.5 9.0 9.5 10.0 10.5 11.0 11.5 12.0

振り返り

初めて 実技テストに向けて歌唱力を高める活動ができる。リコーダーを根気強く練習できる。

初めてが達成できましたか？何を意識して取り組めましたか？

前より高く、大きな声で歌を歌うことができた。リコーダーでは、レが吹けなかったけど、根気強く吹くことで綺麗なレの音を出すことができた。	次はテストなので、今までの練習より大きい声を出せるようにしたい。
わかったこと・気づいたこと・発見したこと	日常生活に生かせること

2024/5/24

レの高い音を出すには、冷たくて強い息で吹けば高いしがる。

カラオケなどに行ったとき、リズムをとったり、高い音色が出せる。

IV 今年度の検証（成果と課題）

- (1) ロイロノートの共有ノート機能は他の教科でも頻繁に活用されているので、生徒たちも慣れていてスムーズに導入できた。またそのツールの使用で主体的・対話的で深い学びにつながったかということ、グループ内での話し合い活動では意見も飛び交って活発にできていた。しかし、それぞれのグループが発表した後の全体でのそれは、意見に対しての質問も特に出ず、それぞれの考えを共有しているだけだったのが残念だった。
- (2) 1年は1人、2年は4人、3年は0人の特別支援を要する生徒がいたが、みんなとは違う易しい曲に取り組むことと個人指導で、諦めて取り組まない生徒はいなかった。
- (3) 今年からスタンプ機能が追加されたことで次々と返信ができたし、気になるコメントには一筆添えて返信するように心がけた。振り返りの時間を授業内で確保したことにより、ほぼ全員がしっかり書いていた。また、合唱の取り組みでは取り組みの初日からの成長の様子を一目で確認できるように振り返りシートの様式を工夫した。

今年度は、研究の柱の2つに絞って取り組んできたが、合唱の取り組みやリコーダーのペア活動

などは③支持的基盤のある学級・学校づくりにも通じていたし、鑑賞の授業での話し合いは④連携・協働して学び合う学校づくりにも通じていたと考えると、こうした音楽科の取り組みと日々の実践が研究主題である『生徒が主体的に学び、考えを深める授業づくりと支持的基盤のある集団づくり』に繋がっていることが確認できた。

V 次年度に向けた改善策

音楽は、1年45時間、2・3年35時間という非常に少ない時間で、音楽の楽しさ、魅力、感動を伝え、情操教育を行っていかなければならない。よい素材を用いて仲間と協働する（関わり合う）中で、また、高等学校で芸術科目を履修しない生徒もいることから、卒業後は音楽を授業で学ぶ機会のない生徒も存在することとなる。一生涯の中で音楽に関わり味わうことのできる、また心豊かな人間の育成の為にも、中学校の音楽科の授業で、いかに印象に残る授業を行うかが勝負である。

保健体育科テーマ

生徒が主体的・対話的に授業を受け、リーダーの成長を促す

I テーマ設定の理由

越知中学校の研究主題は「生徒が主体的に学び、考えを深める授業づくりと支持的基盤のある集団づくり」である。また、学校教育目標にも「自ら学び続ける・・・主体的に社会に参画しようとする・・・」という文言が記されている。この主体的という部分にフォーカスし、研究を行った。保健体育の授業を行っていく中で、質より量が大事になってくる場面やタイミングがあると考えている。特に体育分野の授業では生徒一人ひとりが主体的・対話的に取り組むことで技能の向上が図られる。また、技能のポイントや意識していることを具体的に言語化し、仲間へアドバイスを与えることで、その生徒自身の理解にも繋がる。こういったことの繰り返しで技能が向上していくので、主体的・対話的で深い学びをテーマに設定した。

II 実践方法

- (1) 動画を活用した外在的フィードバック
- (2) ロイロノートの共有ノートでポイントや動きを共有し、実践する

III 実践

- (1) 動画を活用した外在的フィードバック

iPad を使用し、自身の動きを確認 → 修正 → 実践 の繰り返しで少しずつ技能が向上していることを視覚的に確認でき、生徒自身のモチベーションにつながった。

しかし、どの単元で授業をしても、生徒の既に持っているイメージで運動をするか、怖がってできないパターンが多く、特に器械運動のマット運動や柔道の受け身では、頭ではポイントがわかっているが既にあるイメージや感覚が強く、本来の動きができないパターンにつながった。そういった生徒は自らの動きと見本の動きを何度も確認しながら、量をこなしていき、上達に向かわせることが大切だと学んだ。



- (2) ロイロノートの共有ノートでポイントや動きを共有し、実践する

ロイロノートの共有ノートはリアルタイムで全生徒の iPad に配信できるので、上手くできている生徒の動きを全員で確認するなど、生徒に中間評価をすることで、ポイントを再確認でき、主体的な活動につなげる。また、生徒の動きを確認しながら各グループで話し合う場面を設けて、対話的に仲間の意見を聞き、言語化することで、その生徒自身の運動理解にもつなげる。



IV 今年度の検証（成果と課題）

成果

・教科委員中心に授業の流れや動画を送っておき、生徒主体で動く授業を少しできた。教員が動かす授業はスムーズに淡々と進んでいくが、リーダーの育成にはつながらない。生徒自身が主になり、指示していくことで、授業を受けている生徒の活動も活発で、主体的になった。また、iPad を活用して外在的フィードバックを行うことで、自身の改善点を見つけることができ、次の運動ではそこを意識して行うなど、主体的に授業に参加できた。

・共有ノートで生徒の動きやポイントを全体共有することで、授業自体がスムーズに進み、なおかつ生徒の学習意欲の向上につながった。（仲間のできるなら私にもできる等）

課題

・生徒主体で動く授業では進度が遅かったり、大事なポイントを伝え忘れていたりすることがあった。授業前に、教科委員との打ち合わせをもっと細かく行い、スムーズに大事なポイントを伝えられるようにする。

・動画を撮影する時の撮り方がバラバラで、上手く撮影できているグループと上手く撮影できていないグループで、フィードバックに差があった。撮影のポイントや場所などをもっと具体的に指示させるようにしないといけないことを学んだ。

・学期に1回体育委員が変わるので、上手くリーダーの育成ができずに教科委員が変わることがある。

V 次年度に向けた改善策

教科委員の育成を目指し、1学期2学期など、教科委員が変わるまでの間に授業の準備から進行、振り返りまで行えるようにする。そのためにも、3年生の授業や、合同体育委員会を持ち先輩からの指導を受ける時間を設ける。また、1年生が入学してくるので、新2年生は後輩へのアドバイスもできるようにする。

iPad を使用した授業を行う前は撮影方法や場所の確認をし、効果的なフィードバックができるようにする。

保健体育科テーマ

自己評価とフィードバックを通して運動有能感を高める
～メディアポートフォリオの効果的な活用～

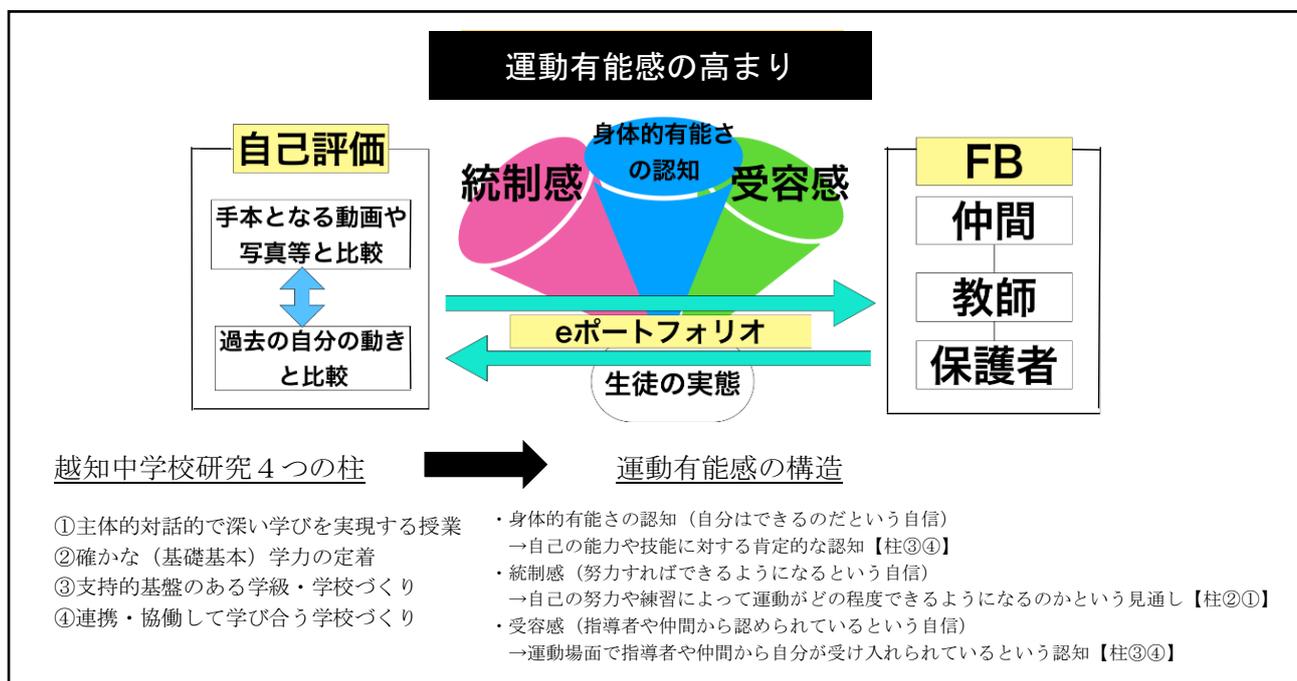
I テーマ設定の理由

越知中学校の今年度の学校教育目標は、「自己実現のために自ら学び続ける意志を持ち、様々な人と協働して主体的に社会に参画しようとする生徒の育成（社会人基礎力を育て、地域や日本、世界で活躍する人づくり～）である。

学校教育目標の実現に向け、生徒が自分の価値を認識し、かつ他者の価値も尊重でき、よりよい社会の担い手となることができるよう、自信を持って成長していくための環境づくりに取り組む必要がある。このことから保健体育科は、まず運動有能感を高めることをテーマとして設定した。自己肯定感や自己有用感は複雑で変化の激しいこれからの社会において、多様な他者と協力し、自分の良さや可能性を見出し、よりよく生きていくための土台として欠かせないものとする。

他者との関わりを通して、自分を価値あるものとして受け入れる感覚（他人の役に立った、他人に喜んでもらえた）を身に付けさせるために、ポートフォリオを活用して、撮影した動きと手本となる写真等や過去の動きと比較して自己評価させたり、撮影した動きを基に仲間や教師、保護者がフィードバックを行ったりすることで、①身体的有能さの認知②統制感③受容感に作用し、運動有能感が高まるであろうと考えた。

※運動有能感の構造を越知中学校研究の柱へ位置づけることとする。（下記参照）



II 実践方法

(1) 生徒アンケート（4月・12月実施）

①キャリアアンケート ②保健体育意識調査 ③運動有能感調査

(2) メディアポートフォリオ（単元ごとに実施）

①保護者からのコメント ②生徒の振り返り ③仲間の評価

Ⅲ 実践

(1) 生徒アンケート (4月・12月実施)

① キャリアアンケート

4月に実施したキャリアアンケート(中学3年生を対象)では、「社会に出た時に体育授業で学習したことが役立つと思うか。」という質問項目に対して、「必ず役に立つ」と回答した生徒の割合は37.5%であった。将来の見通しを持ち授業に向かえるよう、単元ごとに学習の目的と意義を明確に示すなどの手だてを講じ、社会に出た時に体育授業で学習したことが「必ず役に立つに立つ」と実感させる体育授業の実践に注力した。学習したことを実生活に直結させるためには、キャリア教育の視点で、社会に出た時に体育授業で学習したことがどのように役立つかを保健体育授業の中で科学的根拠を示し理解させたことを知識として深めさせ、実践に繋げていくという授業構成に力を入れた。取組については、下記の内容を年間を通して系統的に行い、キャリア教育実践の促進につなげた。将来の目指す姿を明確にさせた上で現状を把握しメタ認知させ、自分を高めていくために必要なことを計画的に実践していくというPDCAサイクルで単元を通して学びを深めていく。

取組① 年度当初にキャリアシートの作成

取組② 単元開始前に単元終了後に目指す姿の具体を考え授業前に相互確認を実施

保健体育授業で学習したことが社会に出た時に必ず役に立つと確信を持って、今私はこんな取り組みをします!

【私が保健体育授業で学んだキーワード】

1 健康の保持増進 2 生涯スポーツ 3 生活習慣の予防・改善
4 体育委員としての健康教育の推進 5 リーダーの資質・能力
6 自己管理能力 7 礼儀とマナー 8 人に感謝する気持ち
9 相手を思いやる気持ち 10 集団行動の意義 11 健康の意義
12 人との繋がり 13 プロセス(過程) 14 社会人基礎力(発信力)

【現状】
自分ができる家事が増えてきたり、自己管理が以前よりもできるようになっている。けれど、早く寝る努力をしていなくて、睡眠時間が十分に確保できなく寝不足の日が多い。朝も目覚めが良くなく、スッキリ起きられない。

【将来の姿】
自分自身の行動や考えに保健・体育の授業で学んだことを結びつけられるようになりたい。

取組① (体育館通路に掲示)

社会に出た時に役立つ★
単元終了後の『私の目指す姿』

せりよくぜんよう 精力善用 ①1人1人が努力して身に付けた力を良い方向に生かすことができる。

私達3年生は、受験生だから一人一人が学習した知識などを分からなくて困っている友達に積極的に教えたり、そして自分が分からない問題は友達に聞いたりして、全員で頑張っていきたい。

じ た きょうえい 自他共栄 ②仲間を思いやりお互い切磋琢磨して目標に向かって前向きに取り組める。

第一志望校に合格できるように、毎日受験勉強を行ったり、テストの点数を同級生に負けないようにしっかりと勉強に取り組んでいきたい。けれど、受験はチーム戦なので3年生全員が志望校に合格できるように、全員で受験勉強を頑張る。

取組② (体育授業用ボードに掲示)

②保健体育意識調査

a. 運動をすることは大切か。

R5 年度全国体力・運動能力調査生徒質問紙(現3年)の結果(R5. 7月実施)

【越知中】 男子: 肯定的回答…100% (強肯定 40%) 否定的回答… (0%)
女子: 肯定的回答…92% (強肯定 50%) 否定的回答… (8%)

【全国】 男子: 肯定的回答 91.7% (強肯定 66%) 否定的回答… (8.3%)
女子: 肯定的回答 84.8% (強肯定 48.7%) 否定的回答… (15.2%)

b. 中学校卒業後、自主的に運動したいと思うか。

R5 年度全国体力・運動能力調査生徒質問紙(現3年)の結果(R5. 7月実施)

【越知中】 男子: 肯定的回答…100% (強肯定 40%) 否定的回答… (0%)
女子: 肯定的回答…78% (強肯定 7.1%) 否定的回答… (21.4%)

【全国】 男子: 肯定的回答 86.1% (強肯定 59.4%) 否定的回答… (13.9%)
女子: 肯定的回答 76.4% (強肯定 41.9%) 否定的回答… (23.6%)

令和5年度全国体力・運動能力調査生徒質問紙(R5. 7月実施)の回答によると、女子の肯定的回答が、やや低い数値を示した。否定的回答をした生徒に対して、「今後どのようなことがあれば自主

的に運動をしたくなると思うか。」という質問に対し、「技がうまくできるようになったら。」「自分のペースでおこなうことができるようになったら。」と回答をした。背景には、運動に対する不安感や自信のなさ、他者から認められる経験が少なく自己肯定感が低いことが考えられる。

生徒は「できる・できない」の結果にこだわり、動きの手順の意味や役割を確かめずに活動に入ることから、一回一回の動きの中で変化する感覚を確かめながら、生徒自身が次の動きのイメージを持って、徐々に可能性を高めていけるような授業展開をしていく。その中で、達成や克服を実感させるスキルを身につけさせる。具体的な手立てとして、①できる感覚と出会うためイメージをつくり身体と対話する②身体の現状と課題を理解するために図解を活用する③つまずきの原因探しは、感覚・視覚・協働学習をヒントにすることとした。(参考文献：鈴木直樹)

①できる感覚と出会うためイメージをつくり身体と対話する

「できた！」という感覚に出会うことが生徒にとっての喜びであり、体育での教科目標の達成につながる。わからない動きには不安が伴い、怖さもあり、チャレンジする勇気さえ生まれにくい。不安を取り除くために、じっくりと自分の感覚と向き合い、慎重に力を加える動きを繰り返し行うことで、感覚を見失わずに動きづくりができるという安心につなげていく。丁寧にゆっくり、じっくり確かめていく動きの変化が、できる感覚となり、不安や怖さの克服につながる。

②身体の現状と課題を理解するために図解を活用する

動きづくりの中で、自分はできているのかどうかは感覚だけではわかりにくいこともある。どの程度まで課題をクリアしているのかを理解するためにも運動の一連の動きを図解で確認していくことが有効であると考えている。それぞれの段階での動きづくりのポイントと、自分のからだ感覚を照らし合わせながら、到達点を明確にしていく。また、起こりやすいつまずきも共有しておくことで、課題への取り組みもわかりやすくなる。また、図解に頼りすぎること、動きがぎこちなくなることも予想されるため、動きづくりでの呼吸の役割にも着目する。動きの初動では息を吐くことや型を決める、留める時は、息を留めているなど、呼吸がスムーズな動きづくりの助けになることも押さえることで、リラックスした活動につながる。身体の現状を理解し、自ら課題を設定していくことが意識的な活動と動きづくりの達成感になる。

③つまずきの原因探しは、感覚・視覚・協働学習をヒントにする

できない感覚は、外側から指摘するより自分自身がよくわかっているものである。できていないことはわかっている、なぜできないのかは、なかなかわからないものである。以上のことから、生徒がつまずいている時こそ逃さず「どういう感じ？」と声がけをし、自分ごとへと導くチャンスをつくる。自らの身体に問いを持つことから「できる」に近づけていく。また、動画や写真、タブレット端末の使用も有効であることから、協働学習を併用することで、互いのつまずきへの気づきにつなげ、学びを深めさせていく。励まし支え合うことの期待と「できる」に出逢えた時の感動は自分ごと以上の喜びにつながると考える。できる・できないの評価の中で委縮してしまうことを避け、できることを繰り返しながら少しずつ変化し、できる感覚に出逢うために自分のからだ感覚を頼りに、明確な指導と安心な授業空間が保障されることが達成や克服を実感する学びになると考える。

③運動有能感調査

鹿毛雅治氏（1990）は、「評価主体と評価基準が内発的動機付けに及ぼす影響」を明確にしている。自己評価が他者評価よりも内発的動機付けを高め、評価基準に関しては、相対評価が内発的動機付けに負の効果をもたらし、個人内評価が内発的動機付けを高めると述べている。以上のことを踏まえ評価する主体が生徒であるという自己評価が内発的動機付けを高める上で重要であると考えた。

身体的有能さの認知を図るアンケート項目は、すべての質問項目に対して、否定的回答が多く自己評価が低いことが明らかとなった。課題解決方法が選択できなかった生徒の多くは、運動の上達感が低いといえる。このことから自己評価をする場面において、より課題解決方法の選択をしやすくするために、手本となる動画を提示し一連の動作のイメージをもたせた上で自己評価をさせた。また仲間からのフィードバックによって課題解決方法の選択や、運動の上達につなげさせた。

統制感を図るアンケート項目で「努力さえすればたいいの運動は上手にできると思うか。」という質問項目に対して、否定的回答をしている生徒は、他人と比較してしまうという理由が多かったため、過去の自分と比較してどれくらい伸びたのかで分析していくようにと比較対象は他人ではなく自分に置くように助言を入れた。

受容感を図るアンケート項目で「運動をしているとき、先生は励ましたり、応援したりしてくれる」という質問項目に対して、否定的回答をした女子生徒一人にスポットを当て、授業内で必ず1回以上の肯定的ストロークと矯正のストロークを入れた。また、a同様、仲間からのフィードバックの方法の一つとして見学者用の振り返りシートに肯定的フィードバックと矯正のフィードバックをさせる枠を追加し、生徒間でのコミュニケーションの機会を増やすことを目的とし、直接的フィードバックに加えて、授業者が意図的にロイロノートアプリケーションで送信したり、共有をかけたことで相乗効果につなげさせた。（下記参照：見学者用振り返りシート）

振り返り めあて：大内対りのポイントを理解しよう。

まとめ：1・2・3のリズムで相手の内側を「の」を振くようにする。

練習前・中間検証の動画 → 練習後の動画

仲間（ ）さんへの

肯定的フィードバック

ペアとの中間検証の時にできなかったのかを話し合い、リッセンさんの動きに習って2の時に足を出さず踏みすぎたので、練習としてさんとこらしたらいかが？」などわからないことをペアに聞いて課題を改善しようとする動きが2人ともみられたので良かったです。

矯正のフィードバック

1・2のリズムは素早く良かったけど、1・2・3の時の3のリズムで遅くなっている。一歩を伸ばしやすくなる。この技に順はず動きが高くなることで次の技への連絡が早くなる。

【課題】

- 受けの足が広い。
- 足跡の位置が揃っていない。
- 受けと足の位置が揃っていない。
- 1・2のリズムが揃っていない。

【改善案】

中間検証の時、iPadで自分の動画をみて茂木先生をもとに分析する。

【成果】

- 受けの足の幅が広がった。
- 受けと足の位置も近くなった。
- 1・2・3のリズムがうまく取れるようになり、技の連絡ができるようになっていく。

↑ **統制感** ↑ **身体的有能さの認知** ↑ **受容感** ↑

振り返り めあて：練習から体落としへの技の連絡をスムーズにできるようになる！

まとめ：練習から体落としへの技の連絡をスムーズにできるようになる！

練習前・中間検証の動画 → 練習後の動画

仲間（ ）さんへの

肯定的フィードバック

さん、下がったり、進んだりする時みづらさんが声をしなから、コミュニケーションをとることで、スムーズに次の技に連絡することができるようになっていたので良かったと思います。

矯正のフィードバック

次は、掛け声なしにスムーズに前に進んだり、さつたりできるようにしたいですね。

【課題】

受けの最初に下がる足が反対で取と噛み合っていない。

【改善案】

中間検証の時取がどっちの足から下がるのかを確認する。

足の出し方が意識できるようにしている。

↑ **統制感** ↑ **身体的有能さの認知** ↑ **受容感** ↑

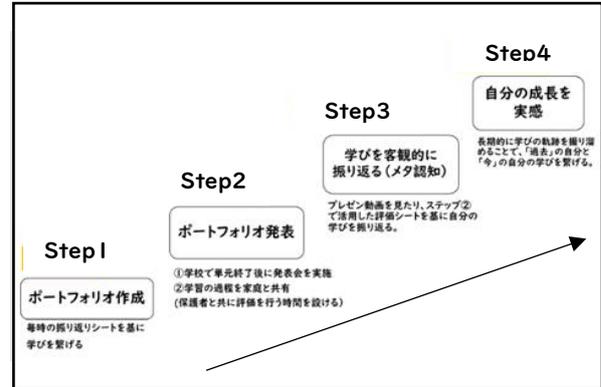
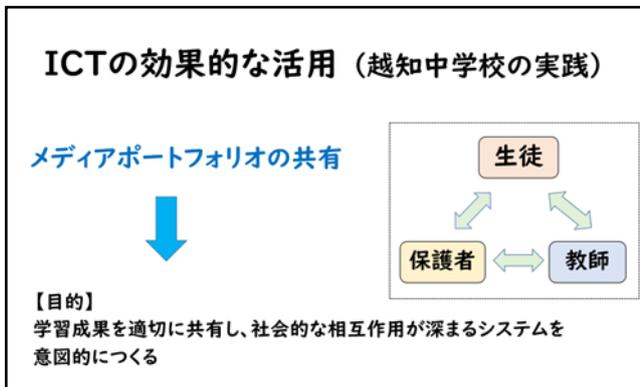
(2) メディアポートフォリオ (単元ごとに実施)

この取組の目的は二つあり、一つ目は、学びをフィードバックすることで、できなかったことができるようになる過程の中に自分の努力や仲間のアドバイスがあることに気づき、運動有能感の向上につなげさせることである。二つ目は、ポートフォリオをプレゼン作成から発表までこれまで蓄積した学びをつなげていくことで適正に自己評価をして自分自身の成長をより実感できるようにすることである。

具体的取組として、単元ごとにメディアポートフォリオを作成して、学びの共有を行う。

(生徒⇄生徒 生徒⇄教師 生徒⇄保護者) ポートフォリオ作成後の発表会では他者に伝えるという過程を通して、自身の学びをより具体的に振り返らせる。取組を実践していく中で、単元ごとに

運動パフォーマンスなどのデータが蓄積されることで、自分自身が、何ができていて何ができていないかを明確に知る。メタ認知した上で自分や仲間との分析を通して、PDCA サイクルで技の習得に向かうという学習過程を共有することで自分の成長を実感することで自信につなげさせていく。



IV 今年度の検証（成果と課題）

（1）生徒アンケート（4月・12月実施）

①キャリアアンケート

「社会に出た時に体育授業で学習したことが役立つと思うか。」

1 学期実施（4 月）

肯定的回答 93.8%
強肯定 37.5%

2 学期実施（12 月）

肯定的回答 100%
強肯定 81.3%

【成果】
肯定評価が 100% になり、強肯定が 43.8p も向上した。単元ごとに目的と意義を明確に示すなど、社会に出た時に体育授業で学習したことが「必ず役に立つ」と実感させる授業構成が成果につながった。また、単元ごとにどのように学びが実社会につながるかを自分の生活に絡めて考えさせる活動が有効であったと考える。

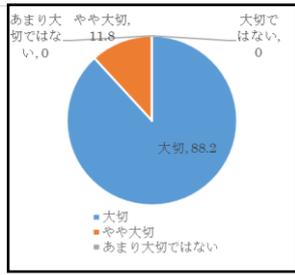
【課題】
体育授業の様々な活動場面で、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現するための基礎（体力向上・健康増進・人間関係の形成・他を尊重する精神の涵養など）を継続して育成していく。

肯定的回答をした生徒の理由

- ・スポーツの重要性などを授業で学ぶことができ、スポーツをすることで身につく力などを私生活や受験勉強などに取り入れることができるから。礼儀や思いやりなどが必ずつく。体を鍛えて将来に役立てたい。
- ・体育の授業では、体育の技術だけでなく、体育理念や健康のためにはどうすれば良いのかなどを学習することができるから。
- ・保健体育の授業では、運動面や技能面だけではなく、自分の健康などについても学んだので、社会に出た時にも自分自身の自己管理能力が役に立つと思ったから。
- ・体育の授業では体力だけでなく、友達や先生と協力したり、課題発見力などの力も身につくから。
- ・具体的な課題に対して、複数人で改善していくので他の人の意見も聞くことができるから。それは、社会に出た時も同様に課題に対して積極的に考える力が身につくから。
- ・身体能力の向上・技能習得だけでなく、相手を思いやる気持ちなどを高めることができ、社会に出た時に必要な力が身につくから。
- ・授業を通して様々なスポーツに触れ合えたり、学んだ専門的な知識をこれからの高校生活や日常生活で活かしたりすることができるから。
- ・自立した時に、自己管理能力が大事だったり、お年寄りになっても心身の健康のためや人と繋がっていくために体を動かすことが大事になってくるから。運動するときに仲間と協力したり、安全面に気を付けて取り組むことはどんな場面でも役に立つと思ったから。
- ・保健の授業で学習した傷の手当の仕方や生活習慣のことが役に立つと思ったから。
- ・自分の動きを動画で見て課題で出たところは改善したり、周りに伝える力（発信力）は大人になっても周りの状況を見て発信したり、自分の考えを伝えることができると思うから。
- ・保体の授業で使っている社会人基礎力はこれからの社会に役立つと思ったから。

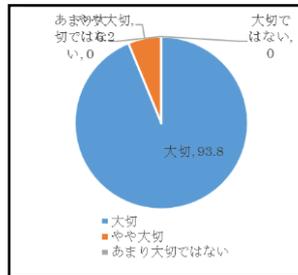
②保健体育意識調査 a. 運動をすることは大切か。

1 学期実施 (4 月)



肯定的回答 100%
強肯定 88.2%

2 学期実施 (12 月)



肯定的回答 100%
強肯定 93.8%

【成果】

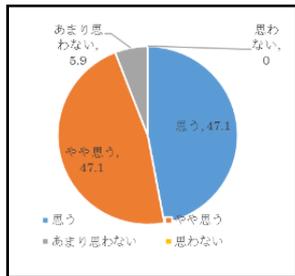
1 学期では肯定的回答 (やや大切) と回答した生徒 1 名が (大切) と強肯定群に入った。運動の取り組み方を論理的に考えていく学習形態を大切に、自分の生活と絡めて「なぜ大切か」ということを掘り下げて考えていくことで新たな気づきがあったのではないかと考える。

【課題】

逆に 1 学期強肯定 (大切) と回答した生徒が (やや大切) と少し評価が落ちていく。今後は、知識の共有を図る時間を単元ごとにとることで、意識づけにつなげる。

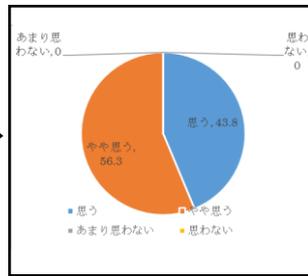
②保健体育意識調査 b. 中学校卒業後、自主的に運動したいと思うか。

1 学期実施 (4 月)



肯定的回答 94.0%
強肯定 47.1%
否定的回答 5.9%

2 学期実施 (12 月)



肯定的回答 100%
強肯定 43.8%
否定的回答 0%

【成果】

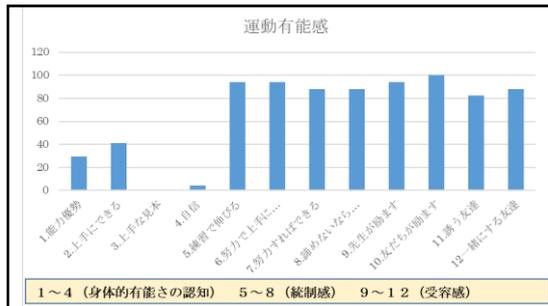
肯定的回答をした生徒の理由として、「健康に生活ができるようになるから。」という数値が最も高かった。健康教育の観点を大切に授業を継続的に取り組んだことが成果につながったと言える。また運動に対する不安や自信のない生徒の手だてを含め、個々のペースを大切にスポーツの関わり方を伝えることができたことにより否定的回答者が 0 になったのは成果である。

【課題】

肯定評価は、100%であったが、1 学期強肯定の数値が下がっているため、今後は、卒業後の運動習慣の形成が心身の健康保持増進のためには必要であることを実生活に結び付けて考えさせていく時間を確保する。

③運動有能感調査

1 学期実施 (4 月)



2 学期実施 (12 月)



【因子別分析】

〈身体的有能さの認知 : 1. 2. 3. 4〉 運動が上手にできるという認知を表す

4 月 : 20.6% 12 月 : 23.5% (+2.9p)

〈統制感 : 5. 6. 7. 8〉 練習したり、努力したりすればできるようになる認知を表す

4 月 : 91.1% 12 月 : 96.9% (+5.8p)

〈受容感 : 9. 10. 11. 12〉 教師や仲間から受け入れられているという認知を表す

4 月 : 91.1% 12 月 : 94% (+2.9p)

(1) 各単元終了後のメディアポートフォリオ (単元ごとに実施)

※少人数グループに編成し、1人7分程度の発表時間とする。

<p>5時間目 【投げ技の連続 膝車→体落とし】</p> <p>めあて 膝車から体落としの連続技がスムーズにできるようになる。</p> <p>まとめ 膝車から体落としの連続技は、緩急をつけて相手に技を掛けることが大事。</p>  <p>膝車→体落とし 練習前 練習後</p> <p>自らの学習成果を振り返りながらポートフォリオにしていく。毎時の振り返りシートを繋げて、分析しながら学びを整理していく。次回につなげるために新たなことを自ら調べる活動が反転学習にもつながる。</p>	<p>柔道の単元を通して</p> <p>精力善用では、学校生活や部活動を通して身に付けた社会性(挨拶、礼儀、マナー、相手への思いやりなど)を、今部活動に体験で来ている小学生に伝えていきたい。</p> <p>自他共栄では、今ある環境(自分が取り組みたいことに協力してくれる人がいる)に感謝の気持ちを忘れず、高校生活に向けての準備を頑張っていきたい。</p> <p>柔道授業で学習したことを具体的に実生活にどのように活かしていきたいのかを自分の現状に合わせて記載する。</p>	 <p>ポートフォリオの発表の様子である。複数のグループに分かれて行う。単元での学びの履歴を伝えていく。プレゼン発表している様子を動画でも取り、自身で客観的に評価をする。</p>																								
<p>パフォーマンス課題 ルーブリック表</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>評価</th> <th>達成と評価</th> <th>継続と直し方</th> <th>質問への回答</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>5</td> <td>内容をよく理解し、自分の考えを明確に表現できた。</td> <td>自分の考えを明確に表現できた。</td> <td>自分の考えを明確に表現できた。</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>内容をよく理解し、自分の考えを明確に表現できた。</td> <td>自分の考えを明確に表現できた。</td> <td>自分の考えを明確に表現できた。</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>内容をよく理解し、自分の考えを明確に表現できた。</td> <td>自分の考えを明確に表現できた。</td> <td>自分の考えを明確に表現できた。</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>内容をよく理解し、自分の考えを明確に表現できた。</td> <td>自分の考えを明確に表現できた。</td> <td>自分の考えを明確に表現できた。</td> </tr> <tr> <td>1</td> <td>内容をよく理解し、自分の考えを明確に表現できた。</td> <td>自分の考えを明確に表現できた。</td> <td>自分の考えを明確に表現できた。</td> </tr> </tbody> </table> <p>ポートフォリオ発表時のルーブリック表である。①主張と根拠②構成と話し方③質問への回答を5段階に分けて自己評価と他者評価したものを個人に返す。その評価を受け、次時につなげる。</p>	評価	達成と評価	継続と直し方	質問への回答	5	内容をよく理解し、自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。	4	内容をよく理解し、自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。	3	内容をよく理解し、自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。	2	内容をよく理解し、自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。	1	内容をよく理解し、自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。	 <p>プレゼン発表後に必ず2人が質問をすることをルール化している。質問者は事前に割り振りしておく。プレゼン発表の内容を聞きながら質問をかためていく。(下記詳細を記載)</p>	<p>～振り返りの視点～</p> <p>① プレゼンに対する成果と課題</p> <p>【成果】 ※3つ以上 (具体的に)</p> <p>② スライド作成や学習内容に対する成果と課題</p> <p>【成果】 ※3つ以上 (具体的に)</p> <p>生徒の振り返りシート。①プレゼンに対する成果と課題②スライド作成や学習内容に対する成果と課題について具体的に振り返らせ、次単元に繋げさせる。</p>
評価	達成と評価	継続と直し方	質問への回答																							
5	内容をよく理解し、自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。																							
4	内容をよく理解し、自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。																							
3	内容をよく理解し、自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。																							
2	内容をよく理解し、自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。																							
1	内容をよく理解し、自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。	自分の考えを明確に表現できた。																							

Q

Tさんは、礼儀やマナー人に感謝する気持ち、相手を思いやる気持ちが柔道に直結するといっていました。私は、どう直結するかわからないので、Tさんの考えを聞かせてください。

A

はい、私は、柔道をするときに使わせてもらっている柔道場にしっかり感謝をすること、そして柔道は一人では技を習得することはできないので対戦相手や柔道を教えてくれる先生にしっかり感謝の気持ちをもつことが大事だと思います。そして投げられるのは痛いけど、相手が技を覚えてくれるからと思いやりの気持ちをもって練習にとりくむことが大事だと思っています。

○成果と●課題

<p>○動画を分析していく中で、大事なポイントを整理できたため、技能習得に向けて修正をかけていくことができた。</p> <p>(生徒Aの振り返り)</p> <p>○練習前と練習後の比較を動画内に書いて着眼点を示すことで理解を深めることができた。</p> <p>(生徒Bの振り返り)</p> <p>○単元Aを通して今の自分にどう繋がるのか、これからの自分にどう繋げていきたいのか、わかりやすいプレゼンだった。単元Aを通して何を習得できたのが明確になっていた。(保護者より)</p> <p>○単元を通して、生徒一人一人が先のことに見通しを持ち、日常生活ですぐに実践する具体を考え、行動に移せる生徒が増えた。(授業者より)</p>	<p>●分析時、専門用語が瞬時に出てこないことが多かったので知識の定着が不十分だと感じたことから専門用語をしっかり落とし込んだ後に実践に繋げていき出来るようになるまで反復練習をしていきたい。(生徒Aの振り返り)</p> <p>●プレゼン時、自分が一番伝えたいところを強調して伝えることができていない。抑揚がない。聞き手に「ここを一番聞いてほしい」という部分は相手の目を見て訴えかけるように話す。(生徒Aの振り返り)</p> <p>●プレゼンの内容に対する質問者が固定されていたので、途中役割分担で全員が必ず発表するよう役割形式に切り替えたが、その役割がなくても自ら発表内容に対する質問が瞬時にわきでてお互いが学びを深められるよう、日頃の授業から工夫を凝らしていきたい。(授業者より)</p>
--	---

V 次年度に向けた改善策

第4期高知県教育振興基本計画の「体」の項目において測定指標にもなっている質問紙「中学校を卒業した後、自主的に運動やスポーツをする時間を持ちたいと思うか。」について、昨年度の結果、(R5.7月アンケート実施)肯定的評価89%に対し、今年度は、(R6.12月アンケート実施)肯定的評価100%と数値が向上した。肯定的回答の中でも強肯定の数値は、43.8%と半数に満たない結果であったため、卒業後に自分の健康のために自主的に運動やスポーツをする時間を持ちたいと思う生徒を増やす方法を模索していきたい。具体案として、生涯スポーツの観点から、スポーツへの様々な関わり方「する・みる・支える・知る」を尊重し、ICTの活用などを通して、体育の授業へ多角的な視点での参加ができるような取り組みを行う。また、子どもたちが生涯にわたって心身の健康を保持増進するためには、卒業後の運動習慣の形成が必要であることから、今後、運動領域と保健領域、体育分野と保健分野との一層の関連を図った指導を心掛け、生徒が運動と健康との関係性を深く理解し、より実生活に活かしやすくなるよう努める。生涯にわたって生活をする上での基盤となる基本的な生活習慣の確立に係る測定指標も新たに設定されていることから、次年度は、健康教育の観点で「保健体育の授業で学習したことに気をつけた生活を送れているか。」という質問項目を追加して研究を進めていく。

運動有能感調査を行うことで、個々への効果的なアプローチについて研究を深めることができた。失敗不安が低下すれば受容感が向上するが、一方で失敗不安が向上すれば受容感が低下するという関係でもあることが示唆される。例えば、体育授業で試合や競争において失敗・敗北体験が嵩むと生徒の不安感や恐怖心が増長されるのではないかと考える。そのような生徒は、「自分はすぐに失敗するし、グループやチームにとって負ける原因だ。」と感じてしまい、きっと自分は周囲から受け入れてもらえないという判断に至るのではないかと考えられる。もちろん、試合や競争では失敗も敗北も体験することになり、間違ってもそれらが不要な体験であると考えてはいけない。大切なのは、失敗や敗北に対して極度な不安感や恐怖心を煽らないような工夫が必要になるということである。つまり、技能や技術が習熟・定着するような授業を展開すると、技能や技術の習熟・定着に至る努力過程がないため、失敗したのは低能力を意味し、自分ではどうすることもできなくなり、不安傾向が増強されるのではないかと考えられる。しかし、技能や技術の習熟・定着に至るまでの過程を重視することができれば、仮に試合や競争の結果が失敗や敗北でも、技能や技術の改善、練習方法の見直しを考えるきっかけとなり、次の成功を目指した活動になるため不安傾向は軽減するのではないかと思う。これは、学びを蓄積しながら学習過程をフィードバックし、自分の成長を実感させるメディアポートフォリオの取り組みに関連させている。互いに学習過程を共有し合い、称賛をいれながら自分自身を高めていくというメディアポートフォリオの相互評価が、受容感を高める。また、生徒同士の相互評価に効果がある。対等な立場での他者の視点を取り入れることで自己評価が効率よく進む。評価する立場になることで、仲間の動きやアイデア、グループ活動を活性化させる関わり方など、よさを見つける力や、仲間に関心を持ち、大切に思う態度が高まる。今後も相互評価を意図的に入れて生徒の省察する力を育てていきたい。

次年度以降も引き続き、ポートフォリオで学習成果を適切に共有し、社会的な相互作用が深まるシステムを意図的につくっていきたい。また、家庭や地域の方へメディアポートフォリオを介して生徒の成長を報告し、多角的なアプローチにより、生徒自身が獲得することのできる運動有能感の向上に繋げていきたい。